

パークリにおける独我論の問題

——初期唯識思想との関連において——¹

源 重浩

問題提起

著名な仏教学者であるエドワード・コンゼ Edward Conzeはその著書 *Buddhism, Its Essence and Development*² において、唯識思想について次のように述べている。

「この唯識思想は、哲学的教説としては、パークリの観念論にとってもよく似ている。パークリは以下のように語る。「心の近くに存在し、また明瞭であるから、人は目を開けさえすると、それを知ることができるような真理がある。私はこのような重要な真理を次のように考える。すなわちあらゆる天の楽器の群れおよび地上の備え —— 一言でいえば、この世界の巨大な枠組みを構成するすべての物体は、心なしでは決して存在しない」と。」³

¹ 本稿は「初期唯識思想と独我論」研究の全体的構想の中の一部をなすものである。

² Oxford, (1951), p.168.

³ コンゼの引用は拙訳によるが、訳出に際し『コンゼ仏教——その教理と展開——』平川彰、横山紘一訳（昭和50年）を参照した。コンゼの文章中のパークリの引用文をはじめとして、パークリに関するテキストは *The Works of George Berkeley Bishop of Cloyne*, Edited by AA Luce and TE Jessop, 1949, Vol. One, Two, London Edinburgh Paris Melbourne Toronto and New York を底本として使用したが、必要に応じて、*The Works of George Berkeley*, Edited by Alexander Cambell Fraser, 1901, Vol. One, Oxford を参照した。なおコンゼがここで引く文章は、前者における Vol. Two,

このようにコンゼは、唯識思想が「パークリの観念論にとてもよく似ている」と述べている。パークリは引文中あるように、世界の万物が「心なしには決して存在しない」とし、「心の外なる物質（事物）の存在」⁴を否定した。

一方、大乘仏教の重要な学派である唯識思想にも、「世界は私の心の現われである」⁵という表現が随所に見られる。このように、パーク

p.43. また後述するパークリの諸引用は拙訳によるが、『人知原理論』*A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge* (1710)については、訳出に際し「岩波文庫」大槻春彦訳（昭和33年）を、『ハイラスとフィロナスの三つの対話』*Three Dialogues between Hylas and Philonous* (1713)については、「岩波文庫」戸田剛文訳（2008年）を、『哲学的評注』*Philosophical Commentaries* については一ノ瀬正樹訳（『哲学』10号、1990年所収）を、『視覚新論』*An Essay towards A New Theory of Vision* については、下條信輔、植村恒一郎、一ノ瀬正樹共訳（1990年）を参照した。

⁴『人知原理論』第一章第二節などを参照。

⁵ 無著（Asaṅga 4世紀）世親（Vasubandhu 4-5世紀）の初期唯識の文献には、「世界は私の心の現われである」という表現が数多く見受けられる。そのような用例としてとりあえず次のようなものが挙げられるであろう。なお詳細は拙論「初期唯識思想と独我論（序説）——『解深密経』第八章の場合——」（『南アジア古典学』3号、2008年所収）参照。

- ① 「大乘において、三界に属するものは識のみであると説かれている。
mahāyāne traidhātukaṃ vijñaptimātram vyavasthāpyate」（*Vimśatikā*, p.3）
- ② 「あたかも幻術でつくられたものが、呪文の力によって象の姿で顕現しているようなものである。そこには、（象）形相のみがあるが、象はまったく存在しない。
māyākṛtaṃ mantravaśāt khyāti hastyātmanā yathā /
ākāramātram tatrāsti hastī nāsti tu sarvathā //27//」（*Trisvabhāvavākārikā*, p.250）
- ③ 「対境と有情と自我と表識とに似た相貌を有する識が生じる。しかし、それには（実体的な）対象は存在しない。それが存在しないから、かれ（能識）もまた存在しない。
arthasattvātmavijñaptipratibhāsam prajāyate /
vijñānaṃ nāsti cāyārthas tadabhāvāt tad api asat //I. 3」（*Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, p.18）
- ④ 「心より他に所縁である所取は存在しないと、智慧によって理解して、かの唯心もまた存在しないことを理解する。所取が無であるので能取もまた無であるから。
cittād anyad ālambanaṃ grāhyaṃ nāstīty avagama buddhyā tasyāpi cittamātrasya nāstītvavagamaṇaṃ grāhyābhāve grāhakābhāvāt」（*Mahāyānasūtrālaṃkāra*, p.24）
- ⑤ 「それゆえに、この（世界の）一切の存在は表識にすぎないものである。

り、唯識ともに「心の外なる物質の存在」を否定し、「世界は心の内なる存在」であるとしたことが、コンゼをして両者が「とてもよく似ている」と言わしめた理由であると考えられる。そして両者が歴史の中でともに「独我論 solipsism」の疑いをかけられたこともまた事実である。⁶

この小論の意図するところは、パークリ哲学において「独我論」の問題が如何に扱われるべきか、また研究者たちによって如何に扱われて来たかを検討し、そこで得られた成果を「初期唯識思想と独我論」の問題の考察に適用してみようというものである。

我々はここで本論に入る前に、パークリの生涯と著作を簡潔に見ておくことにする。⁷

パークリ (George Berkeley 1685-1753) はアイルランドに生まれたが、ダブリンのトリニティカレッジを終え母校の特別研究員 (フェロ

tenedam sarvaṃ vijñaptimātrakaṃ) (*Triṃśikāvijñaptibhāṣya*, p.35)

⑥ 「そのうち、遍計所執相とは何なのか。実体的な対象は存在しなくて、ただ表識にすぎないものが、まさに実体的対象として顕現するところのものである。

de la kun brtags pa'i mtshan nyid gang zhe na | gang don med kyang rnam par rig pa tsam de don nyid du snang ba'o) (*Theg pa chen po bsdus pa*, II. 3, D. 13b)

⑦ 「これらの表識は、実体的対象は存在しないから、表識のみであるというのは、このことに関してどんな喩例があるか。夢などが喩例として考えられるべきである。

rnam par rig pa'di dag ni don med pa'i phyir rnam par rig pa tsam mo zhes bya ba'di la dpe ci yod ce na | rmi lam la sogs pa ni dper blta bar bya'o) (*op.cit.*, II. 6, D. 13b)

⁶ パークリを「独我論」と見る研究者については 3. 1 で、唯識思想に疑義を唱える思想については 4. で扱う。

⁷ *The Life of George Berkeley Bishop of Cloyne*, A A Luce DD LittD, (1949), 『パークリ研究』名越悦 (昭和 40 年)、参照。

一) となり、教会の副監督になるまでの十七年間フェローとして、個人指導教師、図書館員、下級学生監、下級ギリシャ語講師、上級ギリシャ語講師、神学講師、説教師、上級学生監、ヘブライ語講師などを勤めた。1713 年より英国を始めフランス、イタリアなどの大陸旅行。1724 年アメリカにおける宗教、学問普及のために、セントポールズ大学を設立する「パーミュダ」企画を提言し、アメリカに渡った。晩年の十八年間は、アイルランドのクロインで熱心な教会活動を行なった。

哲学的著作として、『視覚新論』*An Essay towards a New Theory of Vision*, Dublin, 1709、『人知原理論』*A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, Dublin, 1710、『ハイラスとフィロナスの三つの対話』*Three Dialogues between Hylas and Philonous*, London, 1713 などがあるが、イングランドの経済、宗教、道德の危機を訴えた『大英帝国滅亡防止論』*An Essay towards preventing the Ruin of Great Britain*, 1721、アメリカのロード島で書いたキリスト教護教論『アルシフロン』*Alciphron, The Minute Philosopher*, 1732、祖国アイルランドに対する忠告『質問者』*Qurrist*, 1735-37、「タール水」の医学的な効用を説いた『シリス』*Siris; A Chain of Philosophical Reflection and Inquiries concerning the Virtues of Tar-water*, 1774 など思想家としての活動は多方面にわたる。

1. パークリ哲学の概観

1.1 存在即知覚

パークリ哲学を構成する主要な議論の一つは、観念ideaについての議論である。観念の語によってパークリが意味するものは、「感知しうる、想像しうる事物⁸」ということである。『人知原理論』は第1節冒頭、観念について次のように述べている。

「およそ人知の対象を考察する者には誰にも明白なことであるが、人知の対象は、感官に実際に印銘されている観念か、心の情緒や働きに注意することによって知覚されるようなものか、または最後に、記憶や想像の助けによって、もとは上述のように知覚されたものを混合するか分割するか或いはそのまま再現するかいずれかして、形成される観念か、そのいずれかである。」

このように人知の対象は ① 感官に印銘される観念か、 ② 心の情緒や働きとして知覚される観念か ③ 記憶や想像により知覚されるものの混合、分割、再現により形成される観念であるか、のいずれかである。パークリはこのうち①を感官の観念 *ideas of sense* ③を想像の観念 *ideas of imagination* と呼ぶ。⁹

感官の観念は、例えば、視覚によってさまざまな程度と変化を伴っ

⁸ 「事物」の原語は *thing* である。「事物」という表現は、「事物」*object* と訳語上の区別を与えるためという大槻春彦『人知原理論』の訳の仕方に従う。

⁹ *ideas of sense*, *ideas of imagination* の語は例えば第30節参照。②については特にない。

た光および色彩の観念が、触覚により硬軟、寒冷、運動、抵抗などについて量もしくは質の大小の観念が、嗅覚により匂いの観念、味覚により味の観念、聴覚により音の観念が得られる。そしてこれらの幾つかは相伴うことが多く、それは一つの「名前」で受けとめられ、これが一つの「事物」と云われるのである。即ちリンゴや樹木、書物などは、私の五官によって得られた「観念の集合 collection of ideas」¹⁰である。感官の観念について、見るか見ないかの選択や視界に現われる特定対象の決定は、自分の意思ではどうにもならない。感官の観念は私の意思の創造物ではない、のである。

想像の観念はどうか。私は自分の心の内にいろいろな観念を自由に喚起できる。自分の意思で観念を作ったり消したりできる。また感官の観念は想像の観念よりも強く、生気に富み判明であり、想像の観念が、しばしば乱雑に喚起されるのに対して「定常性と秩序と整合性 steadiness, order and coherence」¹¹をもっている。

そして、あらゆる観念は私の心の中の存在である。『人知原理論』第3節は次のように述べる。

「私たちの思想や情緒や或いはまた想像によって形成される観念が、心なくしては存在しないことは、すべての人が認められることである。そして、これに劣らず明白に思えるが、感官に

¹⁰ 『人知原理論』148節。以後『人知原理論』に関しては、原則として節のみを出す。

¹¹ 30節。

印銘される多様な感覚ないし観念も、いかに混合され結合されているにせよ（すなわちいかなる事物を構成するにせよ）それらの観念を知覚する心の内よりほかに存在できないのである。」

このように、思想、情緒、想像が作り出す観念だけでなく感官の観念も、すべて心の内なる存在なのである。例えば、目の前にある「机」は存在する。私はその「机」を見るし、これに触れる。書齋を出れば、「机」は存在したとパークリは云う。その意味はパークリによると、「もし私が書齋にいたら机を知覚できたであろうということであり、或いはある他の精神が実際に机を知覚しているという意味である。」¹² 匂いは嗅覚により、音は聴覚により、色彩や形状は視覚により知覚されることによって存在するのである。このような匂い、音、色彩、形状などの「集合」である事物が存在するということは知覚されることなのである。このことをパークリは「そうした事物の存在するとは知覚されることである *Their esse is percipi*」¹³と云う。

また私が見ていないとき「ある他の精神」*some other spirit* が見ているとパークリが云うとき、それは他者（他人）或いは神の精神を意味している。この問題については 2. において述べる。その前に我々はパークリの非物質主義 *immaterialism* と抽象観念批判の問題を見ておかねばならない。

¹² 3 節。

¹³ *op.cit.*

1.2 非物質主義

パークリ哲学を構成する主要な議論に非物質論と抽象観念批判とがある。物体（物質）がまず在ってそれを私が知覚し認識するという考えは、おそらく誰にでも受け入れられる常識的見解である。パークリに至る哲学史の流れも、大きく云えばこのような見方を支持するものであり、当時注目を集めていたロックの立場もこのような見方を洗練させたものであった。このような物質的実体理論に対するパークリの批判は、基本的には以下の六つの項目にまとめられるであろう。それぞれの見方とそれに対するパークリの批判を簡潔に見ていこう。

第一は、物質は直接には知覚しえないが、我々が知覚する観念に対応してそれに類似しており、我々の観念はその「類似物」resemblance 或いは「模写」copy である、という見方である。これに対するパークリの批判は次のようなものである。

「観念それ自身は心なくしては存在しない。だが、観念に似た事物があるかもしれず、観念はその模写ないし類似物であり、そしてこのような事物が心なくして存在する」¹⁴という考えは誤りである。その理由は、感官によって私が知るのは感覚や観念だけであるから、知覚されずに心の外に事物が存在する、ということにはならない。「一つ

¹⁴ 8 節。

の色彩や形状は今一つの色彩や形状に似ることができるだけ」¹⁵であって、「観念は観念に似ることができるだけ」である。したがって「類似物」や「模写」という考えは成立しない。

第二は、物質は観念に類似し得ないにしても観念の原因となり得る、という見方である。これに対するパークリの批判はこうである。外的物体を想定する哲学者は、「感覚にはその感覚が印銘される心と異なる或る原因がなければならない」¹⁶とするが、これも誤りである。これらの哲学者は「物質が、非能動的な、知覚することも、(それそのものとして) 知覚されることもない」¹⁷存在であると考えてるが、このような物質に原因的な力を認めることは、非能動的な存在を能動的な存在と見ることになり矛盾している。哲学者たちは「自分は自己自身の感覚の造り主でない」¹⁸と意識して、その原因がなければならないと考えるが、何故、「唯一の能動者である神」を考えないのか、とパークリは云う。

第三に、「道具説」と云わるべき見方が問題とされる。『ハイラスとフィロナスの三つの対話』の中で、フィロナス（パークリの代弁者）の対論者のハイラスは「物質が原因ではないかもしれないが、至高の能作者が我々の観念を産出するとき、物質がこれに役立つ道具

¹⁵ *op.cit.*

¹⁶ 56 節。

¹⁷ 68 節。

¹⁸ 56 節。

instrumentたることを何が妨げるだろうか」¹⁹と云う。これに対するフィロナス（バークリ）の答えは、「完全無欠」の神は「道具」を必要としない²⁰、というものである。

第四は、「機会原因説」である。これは第二第三の説と重なる見方である。「機会原因」とは、「神が我々の心の中に観念を生じさせる場面での、非活動的な、思惟しない存在物 an inactive unthinking being, at the presence whereof God excites ideas in our minds」²¹のことである。このような意味での物質が想定される理由は、観念が我々の心の中に秩序整然と産出せしめられるのを見る時、我々は「観念が生じさせられる場面で、或る固定的で規則的な機会原因がある」²²と考えるからである。バークリの批判はこうである。機会原因論者は物質を、それが「心なくして、即ち知覚されずに存在する自動力のない、感覚のない実体 an inert senseless substance」²³であると考えてるが、このような見解が成立しない理由は、「偶有性 accidents のない実体を想定することが不合理なのは、実体のない偶有性を想定することが不合理であるのと同様であり」²⁴、また、このような物質（実体）が心のうちに存在しない点は一貫している、さりとて空間的場所のうちに存在しない点も絶対確実である。何故なら「あらゆる場所や延長は心のうちにのみ存在す

¹⁹ *Three Dialogues between Hylas and Philonous*, p.217.

²⁰ *op.cit.*,p.219.

²¹ *op.cit.*,pp.219-220.

²² *op.cit.*,p.220.

²³ 67 節。

²⁴ *op.cit.*

るからである」²⁵とパークリは云う。「延長」についてロックは、心の外なる物体そのものに具わる「本源的性質ないし一次性質 *original or primary qualities*」²⁶と呼び、「延長」をその一つの例とした。パークリはこの考えをとらず、「延長」を心の内なるものとした。したがって、パークリにおいてはこのような物質（実体）は何処にも存在しないのである。

第五は、物質を「未知なる何かあるもの *an unknown Somewhat*」とする見方である。これは『人知原理論』第 80、81 節によると、消極的、否定的表現では「実体でも偶有性でもなく、精神でも観念でもなく、無力で、思惟せず、分割できず、不動のもので、延長がなく、どこにも存在しない」ものであり、積極的表現では「実質とか実在物とか存在」というものである。これに対するパークリの批判は、前者の消極的、否定的表現に関して云えば、そのようなものは無でしかない、というものであり、後者の「実質とか実在物とか存在」は単なる抽象的観念にすぎず、そのようなものは実在しない、と云う。抽象観念批判

²⁵ *op.cit.*

²⁶ John Locke, 『人間悟性論』, *An Essay concerning Human Understanding*. テキストは *An Essay concerning Human Understanding*, edited by A. C. Fraser 2vols. Oxford, (1894) を底本とし、*An Essay concerning Human Understanding*, by John W. Yolton 2vols. London, (1961) および *An Essay concerning Human Understanding*, ed. by A. S. Pringle-Pattison, Edinburgh, (1924) および *An Essay concerning Human Understanding*, by John Locke, New ed., London, (1689) を参照した。ロックの引用は拙訳によるが訳出に際し、『人間悟性論』加藤卯一郎訳、岩波文庫、(1940年) および『人間知性論』大槻春彦訳 (『世界の名著』27 所収、昭和 43 年) を参照した。なお本文中の引文箇所は、Fraser 版では Vol. 1, p.170, Yolton 版では p.104, Pringle 版では p.67, by John Locke, New ed. 版では p.85. 四本ともすぐ続けて「これらの性質が私たちの中に固性、延長、形状、運動あるいは静止、および数の観念を生ずることを私たちは観察し得ると私は思う。」とある。

はパークリ哲学の一つの柱であり、そのことについては次章で述べる。

第六は、「基体説」とも呼ぶべきもので、物質論者は、色彩や形状などの可感的性質が物質的基体 *material substratum* に基づき、これに支持されていると主張する²⁷。これに対するパークリの批判はこうである。存在するものは、精神と観念だけである。一方は知覚される受動的な存在である観念であり、他方は知覚する能動的な存在である精神である²⁸。物質的実体ないし基体は知覚せず精神ではない。また物質的基体の定義上、可感的性質を支えるもので、可感的性質は観念となるが物質的基体は知覚されず観念とならない。したがって、物質的基体というようなものは存在しない。

したがって、心の外に物質(的実体、基体)なるものは存在しない、とパークリは主張する。我々は次に抽象的観念の批判を検討しなければならない。

1.3 抽象観念批判

パークリは『人知原理論』「序論」第17節において「抽象の大家である学院の教授たちは抽象的本性や抽象思念の理説のため誤りと議論と

²⁷ 17節。

²⁸ 2節。パークリには1.1で述べたように、「そうした事物の存在するとは知覚されることである *Their esse is percipi*」の表現があるが、『哲学的評注』*Philosophical Commentaries*には、「存在することは知覚されることである、或いは、知覚することである。Existence is percipi or percipere .」No. 429の表現もある。またNo. 580には「心とは知覚の集積 *congeries* である。知覚を取り去れ、そうすれば君は心を取り去ることになる。知覚を置いてみよ、そうすれば君は心置くことになる。」とある。

の多種多様な、込み入った、迷宮に連れ込まれてしまったように見える」が「思索する人々の思想に広い影響を及ぼした点で、この抽象一般観念 *abstract general ideas* の原理をこえるものはない」と云って、抽象観念批判を展開する。事物が心の外に存在するという「物質的実体理論」はこの「抽象観念の理論」に依っている。「抽象観念の理論」の批判が彼の「非物質主義」を支えているのである。

それではパークリの云う「抽象観念」とは如何なるものか。それは具体的なもの、特殊的なものを捨象した「観念」のことで、その事例として「延長と色彩と運動の抽象観念」²⁹「絶対空間ないし純粋空間の抽象観念」³⁰「人間の抽象観念」³¹「運動の抽象観念」³²「動物の抽象観念」³³などが挙げられる。パークリによると、抽象観念は、知覚の具体的対象として精神に提示されないし、また感官にも提示されないから、実在的なものではないのである。それでは「抽象観念」はどのようにして形成されるのか。パークリは序論第7節において、次のようなかたちをとると云う。

「例えば、延長と色彩と運動とを有する事物を視覚によって知覚する。心はこの混合観念 *mixed idea* ないし複合観念 *compound idea* をその単純な組成部分に分解し、おのおのをそれだけ見て、残り

²⁹ 序論 8 節。

³⁰ 116 節。

³¹ 序論 9 節。

³² 序論 8 節。

³³ 序論 9 節。

を排除して延長や色彩や運動の抽象観念を形成する。〔この場合〕色彩や運動が延長なしに存在できるというのではなく、ただ、心は抽象によって延長を排除した色彩の観念や、色彩と延長の両方を排除した運動の観念をみずからに形成できるというのである。〕

このように心は「混合観念」ないし「複合観念」を単純な組成部分に分解し取捨して「抽象観念」を作るのである。

バークリは抽象観念理論の代弁者としてロックを考えているが、『哲学的評注』³⁴には「たとえば、抽象観念の問題に致命的打撃をもたらすことは、結局は、ロックの一般的三角形に致命的打撃をもたらすことである。」と述べ、ロック批判に向かう。そのロックは『人間悟性論』³⁵において次のように述べている。

「三角形の一般観念〔これでも最も抽象的な、包括的な、困難な観念ではない〕を形成することは、いくらかの労苦と熟練を要求しないか。というのは、この三角形の一般観念は、斜角でも直角でもあつてはならず、等辺でも等脚でも不等辺でもあつてはならず、同時にそれらのすべてでなければならず、どの一つであつてもならないからである。」

バークリにとって、このような「同時にそれらのすべてでなければならず、どの一つであつてもならない」し、また「幾つかの相異なる

³⁴ No. 687.

³⁵ 第4巻9.

矛盾した観念の或る部分がその中で結びついている」³⁶ 三角形の抽象観念は承認できないものであった。パークリは『人知原理論』第 67 節において次のように云う。

「どこにこの実体（物質）は在ると想定しうるか。心のうちに存在しないということでは一致している。また〔空間的〕場所のうちに存在しないということも劣らず絶対確かである。なぜなら、すでに証明しておいたように、あらゆる場所や延長は心のうちにのみ存在するからである。それゆえ、残るところは、かような実体がどこにも全く存在しないということである。」

ロックが心の外の物質の一次性質として見た「延長」をパークリはこのように、「心のうちにのみ存在する」と考えたので、パークリによると「延長」などから成立する「物質（的実体）」は心の外にはどこにも存在しないのである。

このようにパークリは「抽象観念理論」は否定したが、「抽象」そのものを否定した訳ではない。パークリは序論第 12 節において、「私は一般観念 *general ideas*があることを絶対的に否定するのではなく、ただ抽象一般観念 *abstract general ideas*があることを否定する。」と云う。パークリの云う「一般観念」とは如何なるものか。「一つの観念は、それ自身において考えられるとき特殊であるが、同じ種類の他のすべての観念を表示するように、換言すれば表わすようにさせられること

³⁶ *op.cit.*

によって、一般的になるのである。」と云う。彼は「抽象観念」を批判するにあたり、幾何学の問題を取り上げる。彼によると幾何学の対象は「抽象的延長」でなく具体的なもの特殊なもの、即ち「形状」figure³⁷でなければならないが、この「形状」は無限大のものではなく「大きさの終わり」termination of magnitude³⁸である。即ち、幾何学は「抽象観念」ではなく「一般観念」を研究しなければならない。

例えば幾何学者が長さ 1 インチの黒い線を引くとする。「この線は、それ自身では一本の特殊な線であるが、それにもかかわらず、その意義に関して一般的である。」³⁹ こうして、「あの特殊な線は一つの記号とさせられ、これによって一般的となるが、同様に、線という名前は、絶対に〔それ自身だけを〕取れば特殊であるが、記号であることによって一般的とさせられる。」⁴⁰と云う。このように「一般性」の考えはバークリの「記号論」や「普遍性」の議論に関連するが、紙数の制約があるので、今はこれらの問題に立ち入ることは控えることにする。

2. 精神、自己、神

バークリは「人知は二つの項目に、すなわち観念という項目と精神という項目に、自然的にまとめられる。」⁴¹と云う。即ち、人間の知識

³⁷ *An Essay towards A New Theory of Vision* § 124

³⁸ *op.cit.*

³⁹ 序論 12 節。

⁴⁰ *op.cit.*

⁴¹ 86 節。

については、感官の観念と記憶、想像の観念を含む観念に関する項目と、精神に関する項目との二大領域がある。そして精神と観念との関係については、まず精神と観念は同じでない。したがって「精神の観念」⁴²というものはない。精神は「思考し意思し知覚するもの」⁴³で「能動的で不可分な実体」⁴⁴であり、観念は「無力ではかない依存的な存在物で、それだけで存立せず、心すなわち精神的実体によって支持される、換言すれば、心すなわち精神的実体のうちに存在する。」⁴⁵したがって精神が観念より、より根源的であると云える。

また我々は、「我々自身〔という精神〕の存在 *our own existence*」⁴⁶を「内部の感じ *inward feeling* 或いは内省 *reflection* によって了解」⁴⁷する。このような「知」のあり方は「確実にして直接的である *immediately*」⁴⁸から、一種の「直知」であると云えるであろう。我々は我々自身即ち精神に関して厳密な意味で「観念をもつことはない」⁴⁹が、「ある知識ないし思念 *notion* をもつ」⁵⁰ことができる。つまり、「自己自身の心（精神）」は対象化することが困難であるから、「内部の感じ」や「内省」によって直知され、「知識」ないし「思念」をもつ

42 138 節。

43 *op.cit.*

44 89 節。

45 *op.cit.*

46 *op.cit.*

47 *op.cit.*

48 147 節。

49 89 節。

50 *op.cit.*

ことができるのである。

バークリ哲学において「非物質主義」と「抽象観念批判」は体系の基礎であり方法論の柱である。そして更にそれらを根本的に支えるものとして、神に関する議論がある。『人知原理論』の「表題」には「諸学問の誤りおよび困難の主要原因ならびに懐疑論、無神論、無宗教の根拠を探求する」の語が付されており、「結語」には「福音書の有益な真理を尊敬し信奉するように読者や学識ある人々の心をいよいよますます仕向けることができなかつたとすれば、私は自分の研鑽をもって全く役に立たないむだなことと見做すであろう」と述べている。バークリ哲学にとって神学的議論は思想の周辺部に位置するものではなく、核心部分を占めるものなのである。

前述したように、私が知覚していない事物^{もの}の存在を保証するものは、「ある他の精神」が知覚しているということである。「ある他の精神」とは、とりあえずは、自己以外の他者の有限な精神ということである。しかしバークリの場合それだけに止まらない。たとえ誰一人として知覚する人がいなくても、無限な精神即ち神が知覚しているのである。

バークリにおいて、我々をとりまく外的世界は感官の「観念の集合」である。そしてこの感官の観念は「定常性と秩序と整合性」をもっている。また我々にとって「真昼に眼を開くと、見るか見ないかの選択や視界に現われる特定対象の決定」⁵¹は我々の能力をこえている。こ

⁵¹ 29 節。

のような感官の観念を産出しているのは何か。ロックのように「物そのもの things themselves」⁵²を想定しその模写、摸像として観念を考えず、自己そのもの（精神）が産出するとも考えないならば、後に残るものは神である。

このような観念の「系列ないし序列の見事な結合は、その造り主の智慧と仁愛とを十分に証明するものである。」⁵³とパークリは云う。ここで彼は造物主としての「神」を持ち出すことによって、思想構成を整合的ならしめるだけでなく、「神の存在証明」を行なうという二重の効果を得ていることになる。神学的議論は、ロックやカント⁵⁴において控え目なかたちでなされているのに対し、パークリの場合、存在論認識論という哲学的議論の中核部分において登場する。ここにパークリ哲学の特徴がある。

ここで諸存在の「三種の知られ方」が出揃ったことになる。即ち、観念は知覚によって知られ、自己自身（精神）は直知によって知られる。そして神は理知による「推理」によって知られるとパークリは考えている。⁵⁵「一切の植物、星辰、鉱物、総じてこの世界の体系のあら

⁵² 『人間悟性論』例えば、Book II, Chapter V, 1, Chapter VIII, 23 など。

⁵³ 30 節。

⁵⁴ 拙論「カントにおける「本来の自己」の問題——主として認識論の範囲において——」（『仏教 その文化と歴史』、1996 年所収）参照。

⁵⁵ 第 147 節には、「神は、我々自身から別なあらゆる心ないし精神と同様に、確實にして直接的に知られる。」とあるが、このことはどう解釈すべきであろうか。神が「確實にして直接的に」知られるとは、神を「端的に見る」という意味ではない。そのようなことをパークリは否定する。第 148 節には、「万物の至上な主を見るに（中略）ただ我々の眼を開きさえすればよいのである。〔ただそうは云っても、〕私は（ある者が主張するように）端的かつ直接に見ることによって、神を見

ゆる部分」⁵⁶は我々の「観念の集合」であるが、この「定常性と秩序と整合性」をもち我々の意思では勝手に産出できない観念は、心の外の物質が無く、我々の精神が生み出すのでもないならば、その「原因」としての神が存在する筈だ、存在しなければならない、とするのがパークリの「神の存在証明」である。

以上 1. でパークリ哲学を概観し、2. で「精神、自己、神」の問題を考察したが、次に本稿の主要テーマである「独我論」の問題を検討する。

3. 「独我論」の問題

3.1 パークリ哲学を「独我論」と見る説

パークリの哲学は従来「主観的観念論」の典型のように云われることが多かった。たしかに「存在することは知覚されること」であるとし、知覚された「観念の集合」が世界となるパークリの哲学は、「観念」を強調するという点で一種の「観念論」と見る人は多いであろう。

パークリにおいて「存在することは知覚されること」であり、「観念」が心の内にしか存在しないということであれば、森羅万象をすべて心の内で語ることになり、そのような「観念論」は、客観性が保証されないという意味で、「閉じて」しまっているのではないか。如何なる意

る、とは考えないのである。」とある。それは「神の存在証明」から云って当然である。「直接」とは、心情的に「直接」なのである。(大概春彦訳『人知原理論』訳注 p.218 参照。)

⁵⁶ 36 節。

味でも「閉じた」観念論は「独我論」になる。バークリ哲学を「独我論」と見る研究者としては Friedrich Überweg⁵⁷、J.M.Hone & M.M.Rossi⁵⁸、Bertrand Russell⁵⁹、石本新⁶⁰、I.C.Tipton⁶¹などが挙げられるであろう。

ユーバーヴェーク (Friedrich Überweg) は、十九世紀に出版されたバークリ研究の記念碑的著作⁶²の中で、次のように述べている。

「バークリの議論は、議論している者のみが存在しているという想定 (いわゆる「理論的自我主義」もしくは「独我論」) へと導くであろう。」

また、ホーンとロッシの二人 (J.M.Hone & M.M.Rossi) は次のように述べている。

「(バークリの)新しい原理は独我論に陥る危険を避けることは不可能である。その危険というのは、即ち、我々の心が、そして我々の心のみが、真実であることを主張する危険である。」

辛辣な哲学史家でもあったラッセル (Bertrand Russell) は、知人に宛てた手紙の中でバークリに触れて、次のように述べている。

「物理学者たちがあの気の毒な老僧正バークリにいかにか賛同して

⁵⁷ *Berkeley's Abhandlung uber die Prinzipien der menschlichen Erkenntnis*, Leipzig, (1869), p.123.

⁵⁸ *Bishop Berkeley his Life, Writing, and Philosophy*, London,(1931), pp.61-62.

⁵⁹ *Autobiography*, Sydney,(1967), p.433.

⁶⁰ 『外部世界はいかにして知られうるか』 *Our Knowledge of the External World*, London, (1914). (『世界の名著』53、昭和46年) p.145.

⁶¹ *Berkeley, The Philosophy of Immaterialism*,(1974), p.88.

⁶² J.O.Urmson, *The British Empiricists*,Berkeley,Oxford,(1982), p.177.

来たかは面白い。君も覚えているだろう。僕たちの若い頃には、
観念論というのは、もちろん、相当なものなのだが、パークリ僧
正のそれは、むしろおめでたい部類だと教わった。でも今でも生
き残っているのは、パークリの観念論だけだ。パークリは僕には
いい感じがしないが、論駁しようとは思わない。

もちろん、何と云っても、パークリは独我論のはずだ。僕はハ
ーバードである大学の教授職にあったホワイトヘッドと、このテ
ーマで講義をしたことがある。そのとき僕は、自分が理解できな
いパークリの著作の諸部分を構成するのは、もし僕が独我論者だ
ったらやむなく信じざるをえないが、そうじゃない僕には、殆ん
ど出来そうもないことのように思われると云った。」

石本新はラッセルの『外部世界はいかにして知られるか』の訳注に
おいて、次のように述べている。

「(パークリは) 極端な唯名論的な観念論を主張して、外部世界の
存在のみならず普遍者の存在をも否定して、結局、唯我論と懐疑
論に到達した。」

また、ティプトンは上述のラッセルの一文に触れる形で次のように
述べている。

「(パークリの考えは) 明らかに独我論になってしまう恐れがある。
もし私が私自身の心のうちに観念しか意識しないとすれば、パー
クリは私が私自身の観念の圏域をなんとか破ることができるし、

私自身の心と観念の外に何ものかが存在すると主張することが正当化されることを、示さなければならない。このことから、パークリの観念論は、もちろん、なんと云っても、独我論のはずだ、というあのラッセルのあの見解が出てくるのである。」

以上のような見解がある一方、「独我論」ではないとする研究者としては、Alexander Campell Fraser⁶³、Rudolf Metz⁶⁴、G. A. Johnston⁶⁵、大槻晴彦⁶⁶、名越悦⁶⁷などがあげられるであろう。我々はここで、パークリ哲学において、心の「内と外」の問題と「実在」の問題がどうなっているかを検討し、そこから更に「他者存在」の問題と「夢による論証」の問題へと考察を進めることにする。

3.2 心の「内と外」と「実在」の問題

パークリでは心の外なる世界即ち「外界」ということは、どのように受けとめられているのだろうか。我々の思想、情緒また想像というものは心の内なる世界即ち「内界」の存在である。又、リンゴや石や樹木などは私の五官（感官）が得た「観念の集合」であるが、これらの「事物」も観念である点では心の内なる世界即ち「内界」の存在である。一方常識では、リンゴや石や樹木などは心の外なるものであ

⁶³ *The Works of George Berkeley*, Vol.1 ; Philosophical Works, 1705-21, Oxford, p.339.

⁶⁴ *George Berkeley Leben und Lehre*, Stuttgart,(1925), p.109.

⁶⁵ *The Development of Berkeley's Philosophy*, London,(1923), p.205.

⁶⁶ 『人知原理論』(昭和33年) p.191.

⁶⁷ 『パークリ研究』(昭和40年) p.199.

り、「外界」の構成物である。この立場では、心の外なる「物質（的実体）」を感覚が知覚することによって成立した「観念」は「物質」そのものではなく、その「物質」の模写である。心の外に物質よりなる世界が実在する、このような考え方をバークリは強く否定する。これがバークリの「非物質主義」である。我々はバークリが「実在」という語をどのような場面で使用するかに注意しなければならない。彼は懐疑論 *scepticism* に反論するために何が重要であるかを論ずるにあたり、「実在」について次のように述べている。

「最も重要と思われることは、まず始めに事物 *thing* とか実在 *reality* とか存在 *existence* とかの意味を明白に説明することである。なぜなら、これらの言葉の意味を確定してしまわないかぎり、事物の真実な存在について議論し、あるいは真実な存在に関する知識をもつと称しても、無駄であるからである。」⁶⁸

このように「実在」の語に注意を喚起する一方で、「自然の造り主によって感官に印銘される観念は実在物 *real things* と呼ばれる」⁶⁹と云う。即ちバークリにとって「観念」は「実在物」なのである。ただ「実在」ということを問題にすると、「観念」には二種類ある。リンゴや石や樹木などの、造物主たる神によって感官に印銘される観念即ち感官の観念は「実在物」であるが、我々自身が形成する観念である「妄

⁶⁸ 89 節。

⁶⁹ 33 節。

想」は「実在物」ではない。それでは、我々自身が形成する観念である「想像の観念」はどうか。この問題に関してバークリは「想像の観念」にも実在性を認めるが、「感官の観念」と比べた場合、「感官の観念」の方が「想像の観念」より多くの「実在性」を有するという云い方をする。⁷⁰「感官の観念」の方が「想像の観念」より多くの「実在性」を有するというこの意味は、「感官の観念」は、眼を開けたら机が見え、閉じたら消える。見える見えないは私の力能を超えている。

⁷¹「心を触発する点や秩序正しい点や判明な点で勝っているという意味であり、そしてまた、知覚する心が虚構でないという意味である。」

⁷²例えば「私が日中に見る太陽は実在の太陽であり、夜分に想像する太陽はその観念なのである。」⁷³バークリは「実在」という言葉をこのような意味で使う。

そして、この「定常性と秩序と整合性」を有する、「実在物」たる「感官の観念」を支えているのはバークリの場合、神である。神は我々にとって「外なる存在」である。「外なる存在」である神の考えを持ち込むことによって、私の心の内なるものである「感官の観念」は「客観性」を得ることになる。即ち、バークリの観念論は「閉じていない」ことになる。

⁷⁰ 36 節。

⁷¹ 29 節。

⁷² 36 節。

⁷³ *op.cit.*

3.3 「他者存在」の問題

それでは「他者存在」の問題はどうなるのか。自己以外の他者が存在すると云い得て始めて、パークリの哲学は「独我論」ではないということになる。パークリの著作において「他者存在」の問題に言及する箇所は少ない。僅かに散在する文章を辿って議論を進めよう。

『人知原理論』において最初に「他者存在」の問題が言及されるのは第三節である。「事物の存在するとは知覚されることである」と云うパークリは、書齋の机を私が知覚していなければ「ある他の精神」がその机を知覚していると述べていた。「他の精神」とは究極的には神であるが、神の次元へ向かう前段階として、私以外の被造物的存在としての「他者」の精神が考えられる。パークリによると、我々自身の靈魂と「他者の精神」との間には一種の関係性が存在している。つまり「私たち自身の靈魂と他の精神とは、〔例えば〕私によって知覚される青とか熱とか〔の観念〕が他人によって知覚されるそれらの観念に対して有する連関と似かよった連関を有する。」⁷⁴と云うのである。更に彼は次のように云う。

「私は、観念の運動、変化、組み合わせをいくつか知覚するが、それによって私は、そうした運動や変化や組み合わせに伴いかつそれらを産むのと同時に生じるある特定の、私自身に似かよった、

⁷⁴ 140 節。

能作者があることを告げ知らされるのである。それゆえ、他の精神について私の有する知識は、私の観念の知識が直接的であるようには直接的でなく、観念の介在 the intervention of ideas にもとづいている。」⁷⁵

このように、「観念の運動、変化、組み合わせに伴いかつそれらを産むのと同時に生じるある特定の、私自身に似かよった、能作者」即ち「他者存在」が観念の介在によって間接的に知られてくるのである。このような知は「直接知」でなく「理知〔的推理知〕 reason」⁷⁶である。パークリにとって「神の存在証明」は先に触れたように、「推理知」によるものであった。私の感官に「定常性と秩序と整合性」をもつ諸観念を能動的に産出せしめる能作者、神が存在しなければならない。これは直接知でなく間接知によって知られる。「神の存在は人々の存在よりはるかに明白に知覚される」⁷⁷と云うパークリにとっては、神存在の方が他者存在よりも「はるかに明白に」理知的推理されるのである。したがってパークリは他者存在の理知的推理よりも神の理知的推理の方を、より確かなものとみなしていたことになるが、それは何故か。その理由は、他者存在を推理させる「介在物」、即ち、私の身体に似かよった身体、動作、しぐさ、表情など、これらはすべて私の「観念」でしかないが、この「観念」を支え、その「客観性」を保証

⁷⁵ 145 節。

⁷⁶ 89 節。

⁷⁷ 147 節。

しているのは神だからである。

「まことに造物主のみが、その力ある言葉をもって万物を保持しつつ、もろもろの精神のあいだの交わり *intercourse* を維持される御方であり、これによってもろもろの精神は相互の存在 *the existence of each other* を知覚できるのである。」⁷⁸

このように神こそ「もろもろの精神のあいだの交わり」を支えているものなのである。このように、「客観性」を保証する、「外なるもの」としての神が、私と他者の間にある「介在物」を産出している。即ち、神の存在を土台にしてパークリ哲学は「独我論」を脱するのである。

3.4 夢の問題

次に夢の問題について考察する。前述したように、唯識では「世界は心の現われである」と主張される。これに疑義を唱える者に対する唯識の代表的な答え方は、「夢のように」⁷⁹ということである。夢の中でも現実と同じように、時間空間の配列や様々の作用などがあり、夢の最中では現実の経験とは区別できない。夢は意識内現象であってそこで知覚されたものは実在しない。夢と同じように、私が見ているこの世界は私の心が生み出したもので実在しない、と云うのである。

それではパークリではどうか。パークリの文献でも夢の例が同じよ

⁷⁸ *op.cit.*

⁷⁹ 例えば『唯識二十論 *Vimsatikā*』。

うな意味で使われている。『人知原理論』第18節には次のように述べられている。

「実に、すべての人にとって当たり前のことであるが、(また、夢や狂乱などにおいて起こることで議論の余地のないことであるが、) 私たちは、たとえ観念に類似する物体が〔心の〕外に存在しなくとも、現にもっているすべての観念によって心を触発されることができるのである。それゆえ明らかに、外的物体という想定は観念を産むに必要ではない。なぜなら、人々にとって当たり前のことであるが、いま現に観念を〔心の〕内に見ているのと同じ順序で、外的物体の働きなしに、観念は産み出される場合があり、またおそらくは、常に産み出されるのである。」

ここにおいては、あたかも「夢」のように、観念に類似する物体が心の外に存在しなくとも、すでに所有しているすべての観念によって心が触発され得ると述べられている。『三つの対話』におけるフィロナス(パークリの代弁者)は、私は「星や月」を私から離れたところに知覚するが、「夢の中で、そういった物体とかそれに似たものを」⁸⁰を知覚しても、夢で現われるものが心の外にあるとは考えない。そうすると、星や月などの「可感的対象が知覚される現われやその仕方から、心の外にあると結論づけるべきではない」⁸¹と云う。このように

⁸⁰ p.207.

⁸¹ *op.cit.*

夢の例を踏まえて、私の見る外的対象が心の内なる存在であるということが主張されている。

パークリのこのような議論を踏まえて当然異論をとなえる研究者が現われた。今ここではユーバーヴェークとスタック (George J. Stack) をあげておく。ユーバーヴェークは次のように述べている。

「夢の中の形象や幻影というものは、先行する刺激と現実の外的な客観によるということがなければ不可能だろう。すなわち、夢の中の形象や幻影は、想起における表象を再生したり変形したりすることによって生じるのである。パークリの議論がもし妥当なものであるとするならば、夢の中の形象や幻影は、他者の人格の現存在——それは夢の中でも見られるものであるが——となってしまふであろう。」⁸²

また、スタックは次のように述べている。

「パークリは夢状態と通常の知覚状態の間にある差異について何も提出することはなかった、ということに言及することは興味深い。彼は夢あるいは狂乱における感覚与件の秩序と継起は通常の知覚状態のもとで経験される感覚与件の秩序と継起と区別できないということ、少なくとも弁証法的な目的のために想定している。」⁸³

⁸² *op. cit.*, p.119.

⁸³ *Berkeley's Analysis of Perception*, (1970), p.60.

このように二人は、夢と現実を同一視することを批判している。しかしこのようなパークリ批判は的を得ていないと云わなければならない。何故なら、文献を仔細に読むと、パークリは「夢」に関してもう一つのことを語っているからである。即ち、感官の観念と想像の観念とは区別されなければならない、と云うのである。パークリにとって「自然の造り主によって感官に印銘される観念は実在物と呼ばれる」が、一方、想像の観念は感官の観念より「規則性や活気や恒常性において劣る」⁸⁴のである。『三つの対話』においてフィロナスは、感官の観念つまり実在物は想像の観念より「鮮明ではっきりしている」⁸⁵から両者を混同することはないし、「夢の中での視覚像は、ぼんやりとして、不規則で、混乱している」⁸⁶し、「たまたま生き生きとしていて自然なことがあるかもしれないが、前後する生活の営みとは結びついていないから、簡単に実在物から区別される」と云っている。即ち、パークリにとって「夢」は実在物ではない。このように感官の観念も夢もともに心の内なるものではあるが、前者が実在物であるのに対して、後者つまり「夢」は実在物ではないのである。

4. 「唯識と独我論」の問題を考えるうえでの参考点

パークリにおいて、感官の「観念の集合」が物質（事物）であり、

⁸⁴ 33 節。

⁸⁵ p.235.

⁸⁶ *op.cit.*

これは「実在物」であり世界である。感官の観念は私が恣意的に産出できるものではなく、造物主たる神の創造による。神は私にとって「外なるもの」であるから、私の観念は「客観性」をもっている。他者存在は「介在物」を通じて「推理」される。この「推理」を支える「介在物」も神の創造による。即ち、神が私と他者の「交わり」を支えている。このような神中心の哲学が、神学の圏外にいる人にとってどれだけの説得力をもつかという問題は残るが、パークリ哲学は「独我論」ではない、と云わねばならない。

一方、コンゼの云うように唯識思想はパークリに似ている。パークリがそうであったように唯識思想も「独我論」の嫌疑をかけられた。

⁸⁷ここで問題が生じる。

パークリの場合神の存在と働きがその哲学を支えており、「独我論」を回避できたが、創造神、主宰神を認めない仏教はそれができない。唯識思想は、神ということを持ち出さずに、「独我論」でないことの論証をしなければならない。それと関連して、もう一つ注意しておかなければならないことは、パークリが感官の観念（＝実在物）が「心の内から心自身によって生み出される」⁸⁸という考えを否定している、ということである。パークリの場合それは神による印銘ということであ

⁸⁷ 例えば、インド論理学派 Nyāya のバッタ・ジャヤンタ (Bhaṭṭa Jayanta 9世紀後半頃) や中観学派の清弁 (Bhāviveka 490-570頃) の唯識批判。批判の内容については別に論ずる。

⁸⁸ 90節。

扱われたが、唯識思想ではどうなるのか。唯識の場合、私によって見られている世界（外界）を産出しているのは、究極的には、私の心の内なる「アーラヤ識 ālayavijñāna」或いは「潜在印象、薫習 vāsanā、bag chags」である。このようなパークリの批判（主張）を唯識思想は考慮しなければならないであろう。

次に「夢」の問題について考える。唯識もパークリもともに心の外に事物が存在することを否定するために、夢の例が使用される点は共通している。しかしパークリでは、感官の観念たる实在物と心の産物たる夢は区別される。夢は「たまたま生き生きとしていて自然なことがあるかもしれないが、前後する生活の営みとは結びついていない」から感官の観念と簡単に区別できるのである。夢と覚醒時とを同列に扱っているように見える唯識の場合、この点を説得力をもって説明しなければ、パークリの立場からの批判に答えられないし、唯識が「独我論」でないということの論証も難しくなるであろう。

ところで、無著、世親の初期唯識思想をどう解釈するかについて、歴史の大きな流れから云えば、護法（Dharmapāla 530-561）、玄奘（602-664）の『成唯識論』に見られる解釈の流れと、安慧（Sthiramati 約 470-550）の『唯識三十頌安慧釈 *Triṃśikāvijñaptibhāṣya*』に見られるような二つの流れが存在することが知られている。このうち「外界の实在」の問題に関しては、護法、玄奘の解釈がパークリに似ているのに対して、安慧の解釈は「何かあるものの实在」ということを主張

するから、むしろロックやカントに似ているように見える。本稿冒頭において、コンゼが「唯識思想がバークリに似ている」と述べたことに触れたが、コンゼはそれから十年後に出版した*Buddhist Thought in India*⁸⁹ においては、カントやヘーゲルに似たものとして理解している。これはコンゼにおいて、唯識理解が深まったためと考えられるが、今はその問題には踏み込まない。

結論

- ① バークリの哲学は神中心の議論を展開することで「独我論」たることを免れている。
- ② 仏教はそのような創造神・主宰神を認めないから、唯識思想は神概念を持ち込まずに、「独我論」でないことの論証をしなければならない。
- ③ 無著・世親の初期唯識思想には二つの解釈の流れがあるが、「外界」の問題に関してロックやカントに似ている安慧の立場に対しては「独我論」の疑念は生じない。
- ④ バークリ哲学に似ている護法・玄奘の立場に対しては、「独我論」の疑念が生じるが、神概念を持ち込まずに論証しなければならない。その際、3. 4で述べた如く、夢の譬喩を使用するのは困難である。また 4. で述べた如く、自己の心のみで、心に生じた表

⁸⁹ London, (1962), p.251.

象（観念）を説明してはならない、というバークリの主張を考慮
しなければならぬ。

参考文献

【一次文献】

- ① Sylvain Lévi, ed.(1925) *Vimśatikā*
- ② F.Tola and C.Dragonetti(1983) “The *Trisvabhāvakārikā* of Vasubandhu” *Journal of Indian Philosophy*, vol. II. No.3.
- ③ Gadjin.M.Nagao, ed.(1964) *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*
- ④ Sylvain Lévi, ed.(1907) *Mahāyānasūtrālamkāra*
- ⑤ Sylvain Lévi, ed.(1925) *Triṃśikāvijñaptibhāṣya*
- ⑥ Gadjin.M.Nagao, ed.(1982) *Theg pa chen po bsdus pa*

【二次文献】

- ① J.A.Brunton(1991) “The Absolute Existence of Unthinking Thing”
George Berkeley Critical Assessments, Vol. III、
Edited by Walter E.Creery
- ② Edwin B.Allaire(1991) “Berkeley’s Idealism” *op.cit.*
- ③ R.Muehlmann(1991) “Berkeley’s Ontology and the Epistemology of
Idealism” *op.cit.*
- ④ G. Dawes Hicks(1932) *Berkeley*

⑤ John Wild(1936)

George Berkeley A Study of His Life and Philosophy

(みなもと じゅうこう 熊本県立大学非常勤講師)